

内容理解とアウトプットをつなげる授業を目指して

中田典子



Genius English Communication I, II の特徴は、英文の量の豊富さ、原典を活かした英文、トピックの面白さですが、初めてこの教科書を手にしたとき「なるほど」と思ったのは、課末の Summarizing のチャート（「コンセプト・マップ」）とそれをもとにサマリーを書く・話すという流れでした。新学習指導要領のもと4技能の育成を目指す授業へと変わる中で、訳読を介さずある程度複雑な英文を正確に読むスキルの育成と、読んだり聴いたりして理解したものをアウトプットへつなげるヒントがそこにあると感じたからです。

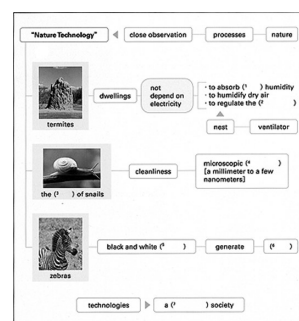
＜＜チャートを活かすCAN-DOリスト

本校のCAN-DOリスト（到達目標）のリーディング、スピーキング、ライティングに、このチャートを利用した要素を加えました。リーディングでは、「1年：教科書にある説明文や伝記文を読んで、表やチャートを完成させることができる」、「3年：教科書になる説明文や評論文を読んで、論の展開を表やチャート等に表すことができる」、スピーキングでは、「1年：教科書で読んだ英文の内容・要約を、チャート等を見ながらリテリングすることができる。内容についての感想を5文程度で話すことができる」、「3年：教科書で読んだ英文の内容・要約を、自分が作ったチャート等を見ながらリテリングすることができる。その内容について5分程度の会話をするることができる」としました。また、ライティングでは、1～3年に「教科書レベルの英文の要約を、キーワードを見れば書くことができ、それに対する自分の意見・考えを書くことができる」を到達目標と

しています。

＜＜理解⇒図式化⇒アウトプット

Genius II の英文理解の段階では、ほぼ原典の英文を生かした本文という特徴を活かし、ジャンルや著者のスタイルに合った活動を取り入れることを心掛けています。教科書のチャート



Lesson 3 課末のチャート

ートの完成だけでなく、生徒が表を作ったり図を描いたりすることで理解をしながら読みすすめる活動を何度か取り入れました。

“Nature Technology” (L3) では、教科書にあるシロアリ、カタツムリ、シマウマの例について、「動植物の名前」「住んでいる場所」「特徴」「可能な使用方法と解決可能な課題」の項目に分けた表に英語のキーワードを記入していきます。「動植物の特徴」の項目には、英文で説明されている内容を図で描きます。Post-reading 活動として、表の4例目に、「ネイチャーテクノロジーデータベース」(<http://www.naturetech-db.jp/>) から自分が選んだ例について日本語で読み、それを表に英語で記入、その表を基に英語で説明するスピーキング活動を行いました。

“Emotions Gone Wild” (L8) Part 3 は、動物の primary emotions と secondary emotions について、対比的・相関的に書かれているパートです。対比を明らかにする表を完成させながら読

み、読解が難しいくだりについては一連の流れを図に描くよう指示をしました。(その図を見ると生徒の理解度が一目でわかります。)その後、その表と図を使い、2つの感情の関係を自分の英語で表現するスピーキング活動を行いました。

◀・ジグソー法：インプット⇒アウトプット

情報量やトピックによって、ジグソー法を使うこともあります。ジグソー法は、クラスを例えば10人(A, B, C, ... J)×4グループに分け、各グループに異なる情報(英文)を与え、グループ内で協力して情報(英文)を正確に理解し、その情報を英語で説明できるようにします。次に各グループのメンバーA, B, C, ... Jを集めて4人から成る班(メンバーA 4人×10班)を作り、それぞれが持つ情報を英語で説明します。そこへ問いを与え、それに対する答えを話し合い班ごとで答えを出す、という方法です。

“Emotions Gone Wild”(L8)で、本文を読み始める前にジグソー法を利用しました。この課では、動物がお互いを思いやる感情を持つとされるケースが4例紹介されています。4つのグループにこのケース(それぞれ教科書で7行程度)のうち1つを与え、グループで内容を理解した後、パラフレイズしたわかりやすい英語で状況を説明する練習をします。その後、組み直した4人の班でそれぞれのケースを英語で説明し、4つの情報がそろった後で著者が伝えようとしていることを班で推測し、英語で発表します。

この方法の利点は、多量のインプットが可能であること、他者に正確に伝える責任を生徒が感じることができるところ、インプットからスピーキングへつなげることができることです。複数のケースやデータを知る、複数の視点や立場から分析するときにこの方法は有効です。教科書巻末のfurther reading教材Read On!の、“When in Uganda...”(RO2)や“World Heritage Sites in Japan”(RO6)等でも利用できるのではないかと思います。

す。

◀・インタビューテストによる評価

コミュニケーション英語の授業では、ほぼ毎時間生徒同士が英語で話をする場面を設けています。その活動を評価するため、2年生の2月にインタビューテストを行いました。先に“Emotions Gone Wild”(L8)のPost-Reading活動として、動物が感情を持っていると思うか、なぜそう思うかについて生徒同士のインタビューをしました。続けて、動物をめぐるcontroversial issuesを5テーマ与え(動物へのテスト、捕鯨、ツキノワグマ捕獲、象牙取引、クローン)、生徒同士でインタビュー活動をしました。その後、インタビューの内容は「レポート+自分の意見」の形でライティングにします。

その活動を踏まえ、インタビューテストは一人5分、自分の選んだテーマについて1～2分意見を述べ、教員がその内容について質問し、さらに生徒が選ばなかったテーマについても質問をする形で会話をします。評価は4点×5項目のルーブリックを使います。ルーブリック表は生徒へあらかじめ渡し、それぞれ到達目標を意識しながらテストに臨みます。評価はその場で行い、ルーブリックのディスクリプタに沿って、今回できていたこと(十分な情報量があった、アイコンタクトができていた等)と、改善すること(繰り返しの表現が目立った、thの発音に気をつける等)を伝えます。

英語で行う授業や生徒同士が英語で話をする機会を単発的に持つだけだった2年前に行った、同様のインタビューテストと比べると、「流暢」に「十分な情報量」を「多様な表現」を使って話せる生徒が増えました。スピーキング力を測ることについて難しい点がありますが、理解⇒アウトプットの流れを2年間継続的に経験してきた生徒に見られた変化は、大変励みになるものでした。

(なかだ のりこ・鳥取県立鳥取西高等学校教諭)